翻刻『親鸞聖人御一生記絵抄』(二)

土井順一

〈凡例〉

翻刻にあたっては、つとめて原本に忠実なるように心がけた。従って、清濁の表記はあえてこれを改めなかった。ただし、通読に便ならしめるため次のような処理を行った。

1 原本に用いられている古体・異体・略体などの文字は、現在通行の文字に改めた。

2 新字体のある漢字は、できるだけ新字体を用いた。

3 片仮名表記のハ・ミ・ニは、平仮名に改めた。

4 段落を設けた。

5 原本に用いられている黒丸の句読点は白丸にした。

6 挿絵は本文に注記し、その後のできるだけ近くに入れた。

なお、本稿は、「翻刻『親鸞聖人御一生記絵抄』(一)」(『国文科論集』第六号、昭和五十九年三月)の続稿である。

吉水禅房御帰入話

範宴の公は。凡俗の男女。一切の衆生。ことぐく極楽往生なさしめ給はんと。広大無量の思召より。日々に山谷を越て中堂薬師如来に懇願し給ひしに。建仁元年御歳廿九歳の正月。新たなる薬師尊の御示現を蒙り給ひ。歓喜踊躍して。同十日より京都六角堂観世音に百日詣をなし給ふ

京都六角堂観世音は　金銅御長壱寸八分の三面六臂如意輪観世音にして。昔淡路の国岩屋の浦に夜々光明をはなつ。土民あやしんで網をおろすに。一の朱の櫃を得たり。蓋の上に。正覚如意輪像壱体。謹上日本国王と記す。かるが故に　禁中に奉りしに。時の帝は人王三十一代。敏達天皇十三年冬十月の事なり。

しかるに皇子聖徳太子十三歳にならせ給ふに。つくぐこの本尊を礼拝ありて宣はく。これわが前生所持の本尊なりとて恭敬なしたまひ。朝暮御身をはなち給はず。其のち逆臣守屋の大臣を誅伐し給ふ折から。四天王に御祈誓ありしが。程なく御存念達せられしかば。其報礼として。四天王寺を難波に。御建立あらんことをおぼしめしたちたまふ。

去によつて山城の国愛宕郡には良材多くあるよし聞しめされ。太子みづから山ふかく入給ひ。しばらく息ひ給ふ折から。かの壱寸八分の観世音。常に御胸にかけさせ給ひ。しばらくも御身をはなち給はざりしが。此ときかたはらなる。多良の木の枝に。此御本尊をかけ置給ひ。やがて御歩行あらんとて。かの本尊を取給ふにさらにうごき給はず。

太子つくぐと思ひ給ふは。是は観世音有縁の地なるべく。又この一州はわれ滅後弐百余歳のゝちは。王城となるべき処なれば。一宇の堂舎を造立し安置なしたまはんと。思したち給ふ折から。忽然として壱人の老翁いで来りて太子にむかひ。君観世音の堂舎をたてんと。思し給はゝ此霊木を用ひ給ふべ

しと。傍なる大木の杉をゆびざす。太子意中を察せしは。これ凡人ならずと恭礼なしたまへば。かの翁礼を返して行方を失ふ。則太子良工に命じて杉柎を伐しめ。此一木をもつて堂塔を造りて。観世音を安置し給ふ。

其後星霜を経て桓武天皇都を平安城にうつし。大路小路を定め給ふに。此堂宇小路の真中にあたれり。されど太子御造立の堂宇を。私に動かさんこと恐れありと。評義まち〳〵なりしが。其夕黒雲四方を覆ひて寸地も見えず。良ありて雲散じ空はれてのち見れば。堂宇そのまゝ。五丈計北の方に退くといへり。

かゝるふしぎの霊仏霊場なるがうへ。薬師仏の霊告かたく。聖人にも。懇願すでに成就のおもひをなし給ひて。夜々参籠なし給ひしなり

範宴の公は。叡岳横川より。六角堂まで三里十八丁の遠路。ことに峨々たる山谷。浩々たる流川を。寒風冷雨をも厭給はず。一百夜歩を運び。暮に叡岳を出て六角堂に通夜なし。暁に横川に帰り給ふ其御心労実に譬に物なく有難かりける御事なり。

斯て已に今一夜にて御満願の夜の暁。しばしまどろませ給ひぬるに。観世音の御告命ありけるは。汝末代濁世の凡夫衆生。出離生死の要路を求めんとおもはゞ。念仏の行にまされる法あるべからず。今この大法を弘通なせる聖者法然房といへる有。早くかしこにいたりて深意を尋ねて汝か迷雲を散ずへしと。告給ふと見て御夢さめたり。

範宴の公は。信心肝にめいじ。礼拝恭敬してさて思めすは。聖者法然といへる大徳いまだわれ聞かず。何国に座ます人やらんと思しながら。叡岳に帰らんとし給ふに。三条の橋にて。安居院の聖覚といへる法印に逢給ひ。互に疎縁の情をのべ畢り。聖覚に問給ふは貴僧法然房といへる知識を知給はすや。

聖覚答て。今専修念仏を弘通し給ふ法然上人こそ。東山吉水にまし〳〵ける。おのれもその高徳をしたひ。上人に帰随して。則今も吉水へ参詣する処なり。

範宴公心中に思しけるはこれ全く観世音の御導ならんと。いと尊く思し給ひ。直に吉水の庵室にいたり給ひ。法然上人に相見し。多年の懇願を明し念仏の奥旨を尋ね給ふ。此とき法然上人六十九歳範宴の公廿九歳の御とき也

法然上人熟々と範宴公の。信智明徳を感美せさせ給ひ。名号の実躰。宗致の源由を微細に告給へば。範宴公たち処に。他力信心を御領解なし給ひ。実も凡俗極楽往生は。此念仏より外はあらじと。日を重ね。月を経て。愈念仏三昧の行に入らせ給ふ。

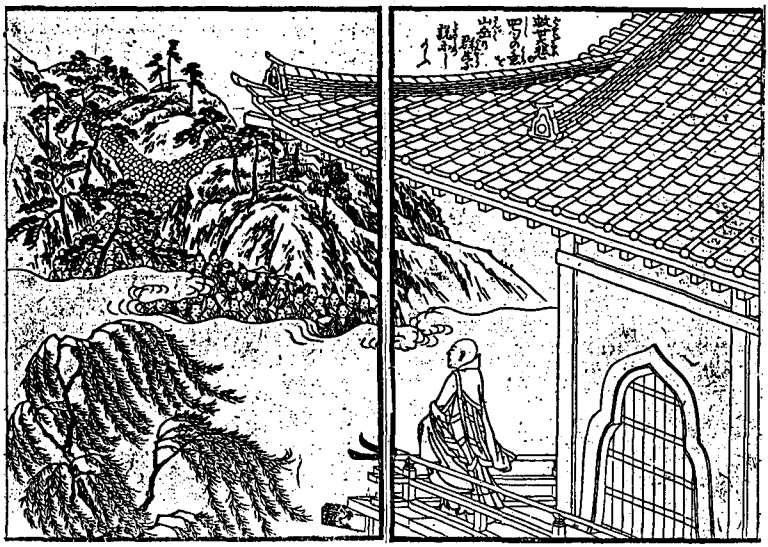
法然上人も其凡ならぬを察知し給ひ。師弟の睦びます〳〵親切にし、則範宴の御名をあらため。綽空とぞ名付させ給ふ

唐土西河といへる処に道綽禅師といふ大徳ありしが。曇鸞大師の塚の前にて。碑銘を見て。忽わか涅槃宗の珠数を切て。他力の門に入たる事を。法然上人思し合せ。又わが名の源空の一字を与へて綽空とは名づけさせ給ふとなり

○偏者申これより已下は文中に開山の御事を聖人としるし。法然上人を上人と書く。読む人その心し給ふべし

斯て聖人は。法然上人に常随給持し給ひ。日夜に上人の教化を請け。朝暮寝食を忘れて。已に三とせを経給ふに。其学行上足の御弟子に超給ふ。理なるかな。九歳の御ときより叡山に登り給ひ。弐十年の春秋を台密及び八宗の経論に眼をさらし給ひ。更にまた専修念仏門に入て三年の螢雪を勤行なし給ふが故。上人の法味。一を聞て万に通しさせ給ふ所なり。

しかるに建仁三年癸亥四月五日の夜。五更の御枕に新たなる霊夢を感しさせ給ふ。聖人六角堂に参詣まし〳〵けるに。更闌人しづまりてのち。俄に異香四方に薫じ。妙音心耳をすます折から。内陣の扉自からに開ら け。善信々々と呼給ふ。聖人不測に思し召。頭を上て見給へば。本尊観世音白き御袈裟を身にまとゐ。大なる白蓮花に端座まし〳〵。聖人をまねきて宣ふは（挿絵第三）



第 3 図

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能荘厳　臨終引導生極楽

此文の意は聖人行者の身。もとより因縁ありて。女に酒する事の設け定まりあるによつて。我観世音玉のごとき女と生れて。汝が妻となり。ともに末世の衆生を導き。極楽浄土に往生なさすべしとの御事なり。

此文を告給ひて猶又宣ふは。是我誓願なり。汝此誓願の心をのべて。一切群生に聞しむべしとのたまふ。

この誓願と宣ふは。観音経に。女人と成てよろしきときは。女の身と生れて。人を済度すべしと説給ふがゆゑ。今も女人とならんと宣ふなり。

此とき聖人礼拝して。六角堂の正面にして。東の方を見給へば。千峯万山連りたる。其山上山下谷々にいたるまで。人ならぬ処なく。数千万億の人充々たり。聖人此人々に向ひ。観世音四句の偈并に我誓願の仏告の意を。つまびらかに解さとし。たとへ末世衆生男女をゑらはず。女犯破戒の身なりとも。極楽往生をとぐるものなりと述給へば。満山の男女。皆々礼拝渇仰せしと覚え

て。御夢はさめにけり。

聖人倩夢のうちの有さまを考給ふに。凡吾朝に於て。肉食妻帯にて。仏法をひろめ給へるは。聖徳太子也。その太子は則救世観音の垂迹なれば。我また太子の行状に習ひて。法流弘通せよと告させ給ふにや。されど戒を犯して極楽往生の御示現こそ心得ねども。是は末世衆生済度の方便の大事。この一条に籠るべけれと。深く心中に秘して。人には更に告させ給はざりけり

此観世音の示現。御当流興隆の御大事にて山岳に充々たる数百万億の人は今現在に御流をくめる人々。皆此夢中に入て。御開山の御教化をかうふりたるものなりと覚ゆ。いとも有がたき御事なり

聖人玉日君に配し給ふ話

于爰月輪前関白道実公。御薙髪まし〳〵て円照禅定と称し奉りしが。兼て法然上人を御帰依ありて。御弟子となり給ひ。上人の教化しば〳〵領解し。無二の信者にてましませしが。或とき吉水の御房に入らせ給ひ。いつ〳〵よりも細かに御芳話ありけるが。公容を改めて上人に尋給ふは。貴師の御弟子数多。何れも浄行智徳の出家にして。在家と申は我兼実ばかりにて。適剃髪染衣の姿ながら。五戒をだにもたもたず。かゝれば出家の念仏と。在家の我々が念仏とは。左こそ功徳の勝劣あるべし。いかばかりの功徳の相違にやと尋給へば。上人答て。出家の申す念仏も在家の唱る念仏も。功徳に於ていさゝかも。勝劣更にあることなし。必御疑念あるべからずと宣へば。公は頭をたれて。上人の仰うたがふべきにはあらざれども。女人を近づけず。不浄の物を食せず。朝夕勤行の清僧が申念仏なれば。自然と功徳も勝るべし。また我ごとく。朝夕妻子の恩愛に縛られ。酒肉五辛も拠なく食し。不清浄の口より唱ふる念仏なれば。必功徳も劣べき理なり。しかるを勝劣甲乙なきとのみにては。愚意領解しがたく。願くば明らかに示し給へ。

上人重て凡念仏に於て。凡聖のへだて且てなし。其由

は弥陀如来の本願は。本為凡夫兼為聖人の誓約悪人摂取の要法なれば。智者善人よりも。愚者悪人を不便に覚し。先助得させんとの本願なれば。在家の凡愚無智の男女を救給ふ。しかれば凡聖の念仏いかでかへだてあらん。必しも疑惑給ふべからず。

其時兼実公歓喜の涙をながし給ひ。斯うけ給はれば。此上更にうたがひなく。弥以弥陀の本願いと有難く尊かりき。これによりておもふに。末代の衆生に。又我ごとき疑念をおこすべきも計がたし。そのときは又誰によりてか。その疑を散ずべきや。希くば今御弟子の中に。正信の行者を壱人。われに給はれかし。我に幸ひ未嫁娘あり。則其行者に配して妻帯となし。念仏往生のまへには。僧俗男女凡聖の隔なきを。末世の行者に示し教ならば。此疑ひある事なからんか。

法然上人聞給ひ。尤の仰うけ給りぬ。こゝに智恵器量円満年齢相応の行者あり。これを奉り候はんとて。則聖人を召され。兼実公の疑惑し給ひし。一什一偈をかたり給ひ。故に御身を公にまゐらせんとす。早く公の姫を妻帯して末世の衆生の迷を解き。妻帯の宗風を弘通せらるべしと示し給へば。

聖人は殊に驚き。速に御答もましまさず。只浄流なし給ひしが。良あつて涙を払ひ。師命を違背すべき道なしといへども。我幼稚にして父母に離れしより。伯父範綱に屢願ひ。やうゝ九歳の春。慈円僧正の室に。多年の懇願を果し。はじめて釈門の数に入。叡岳に勤学すること弐十年。救世菩薩の示現によって。一向専修の行者となりて。今日まで一日片時も禁戒を犯す事なきに。数多の御弟子のうちより撰出され。斯る仰を蒙ること。実に仏陀の冥助にもれ。迚も戒行成就すまじと。吾師にもまた棄させたまふにやと。潸然と歎き給へば。

法然上人宣はく。月輪殿下の御所望。我源空が勧をも辞して。出家の戒行堅固になさんとは尤の事なり。去ながら行者宿報設女犯の四句はいかゞ領解せらるゝや。

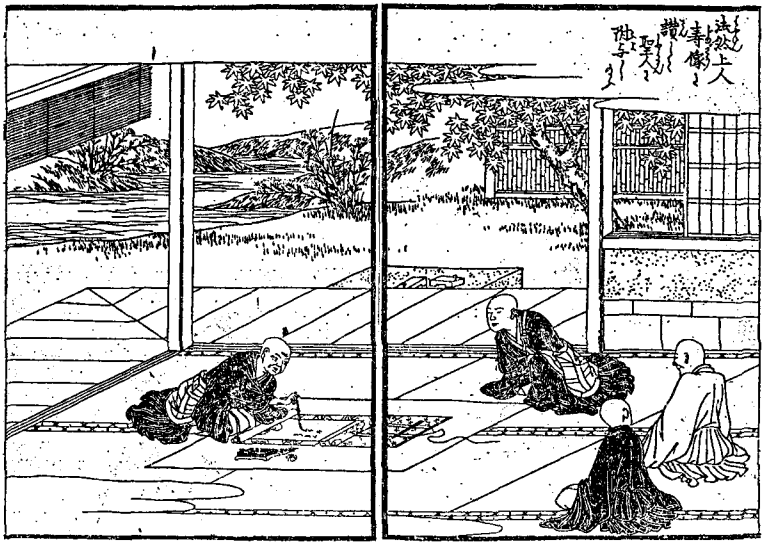
聖人大に驚き。此偈はいかにして吾師のしろしめさるや。

法然上人机上の筆紙をとりて。彼四句の偈をさら〳〵と書て。いかに善信房。去ぬる四月五日の夜。救世菩薩御身に示現し給ふこと。我もともに感得せり。相違やあると見せ給ふに。一字の違あらざれば。聖人も始て示現空しからず。事のこゝに及ぶことを領解し給ひ。師の房を礼拝し。仏告といひ師の御命。謹でかしこまり奉る。

たとへ人あつて。綽空こそ破戒無慙の悪僧なれと謗とも末世衆生済度の為ならんには。何をかは厭ふべしと。速なる御返答に。殿下上人も倶に歓喜し給ひ。直に殿下と御同車にて。五条西洞院の御別殿に入らせ給ふ。

時維建仁三年癸亥十月五日。御歳三十一歳なり。則殿下の姫君玉日の君と申奉り。御歳十八歳にならせ給ふを。御配遇まし〳〵ける。

程なく御男子御出誕あり。御名を範意と号け奉る。されどもいく程なく早世なし給ふ。第二は女子おくろの方。第三慈信房善鸞。第四信蓮房明信。第五有房入道道性。第六高野の禅尼。第七弥女。のち覚信禅尼と申奉る



第 4 図

唐土汴京といふ処に。開宝寺といふ寺あり。境内西北の方に。五重の塔を建立す。しかるに此塔未申の方に（挿絵第四）弐尺余も傾きたり。

よつて工匠の棟梁をまねきて。きびしく其怠りを責るに。棟梁答へて。御咎め御尤に候得ども。これは心あつて態と歪て建たるなり。其由は当寺はよほど高地にして。常に坤の風つよし。故に今真直に建たらんには。百年のゝちは。極て艮に倒れて塔あやふし。今坤に傾き建たれば。自然に春秋の風を請て。百年のゝち真直と成。土地また堅固となりて。万代を経とも傾くことなしと答へしと也。

御開山殿下の御所望によつて。玉日の君と配し給ひ。戒行を破り給ふことを。兎角に批謗する者多かりしといへども。これ等に少しも管り給はず。五百余年の末を察し給ひて。妻帯の宗風を弘通し給ふ事。凡俗の及ぶ処にあらず。もし肉食妻帯を。仏陀の悪み給ふとならば。いかでか斯宗風御繁昌なるべきやこゝを以て御開山の御広徳を仰ぎたてまつるべき物なるをや

上人選釈集御附与之話

月輪殿下兼実公御願によりて。法然上人選釈本願念仏集を選出し給ひ。殿下へ奉る。

此書の奥書に。願くば一度高覧をへたまひてのちは。深く壁底に埋んで。窓前に残す事なかれ。恐らくは破法の人。堕落せんことを。と記し。又此書在世の間は。禅室より披露せしむることなかれ。入滅のゝち博陸槐門よりこれを弘むべしとなり。

殿下大に御喜悦あり。御熟覧のゝち深く秘給ひけるが。上人も草稿を秘し御弟子がたにも堅く見せ給はざる事九年。

しかるに元久二年乙丑四月十四日。聖人いつものごとく。吉水に参りたまふに。上人蜜に聖人をまねき。御身は他力往生の法門に於て。格別の人なれば見すべきなり

とて。かの選釈集を取出し。早く写し取給へ、去ながら。他見は必免し給ふなと宣へば。聖人は三礼し。我れ師に随従給仕する事纔に五年。上足の御弟子多き中に。我壱人に授与し給ふ事。広大の慈恵感佩候得とて。直に書写して御覧に入しかば。聖人の写し給ひし本に。法然上人筆とり給ひ。撰釈本願念仏集。南無阿弥陀仏。往生之業念仏為本。釈綽空。と書そへ給ふ。

此とき聖人師に願ひ給ふは。師已に齢高く在せば。御寿像を画しめんことを乞給ふに。上人免し給ふ。よつて画工にめいじて画しめ。其年七月廿九日成就せしにより て。上人に御覧に入給へば。其時上人筆とりて

南無阿弥陀仏。若我成仏十方衆生称我名号下至十声。若不生者不取正覚。彼仏今現在成仏。当知本誓重願不虚衆生。称念必得往生

と記され給ふ。

此意は善導大師往生礼讃といへる書の第十八の願文を釈し給へる処なり。至心信楽欲生我国のこゝろを解したまへり。我もし成仏せば。十方衆生わが名号をとなへて。一こゑより已下十声にいたらば。すみやかに往生すべし。若生ぜずば正覚をとらじと誓はせたまふとなり。しかるに今正しく成仏し給ひぬ。是もとよりの誓願むなしからざるが故也。衆生此名号を称念せば。必往生を得ること。何のうたがひあらんやとなり。

法念上人みづから此寿像に讃せられ。聖人に与へ給ふ事。御弟子四百余人随従すといへども。聖人にまされるものあらざればなりけり。

御一生記絵抄　巻之上畢